

■WAVE

・「楽しさ」は やる気のもと _____ 村治 昇… 3

■アクセス ナウ!

・人生に生きる、スポーツの力 _____ 有森 裕子… 4

■特集／副読本の意義と重要性

・体育の学習と「副読本」 _____ 松田 恵示… 6

・新版『体育の学習』の構成について _____ 編集部…10

・『体育の学習』を使った授業

① 1年・多様な動きをつくる運動遊び _____ 佐藤 映子…12

② 1年・的当てゲーム _____ 鈴木 聡…14

③ 6年・鉄棒運動 _____ 福島 真実…16

■連載／外野席から〈第25回〉

・「なでしこジャパン」と東日本大震災 _____ 岡崎 満義…18

■実践報告／富山県

・「わかる」「できる」「かかわる」ことを大切にしたい体育学習のあり方 — 本多素奈緒…20

■羅針盤〈第54回〉

・再考 グループ学習—その2／実態と展望

①体育学習から学級生活まで広がるグループ学習 _____ 井樋 述弥…24

②浮く・泳ぐ運動の実践からグループ学習の意味と効果を探る — 濱田 敦志…26

◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



松田先生◆「なでしこジャパン」の活躍が続いていますが、ぼくの周りも、元気なのは女性の方が多い気がします。学校現場も同じように見えたりします。負けずにがんばりたいと思うのですが。男性のみなさん、ガンバ、です(笑)。



本多先生◆去年は元気いっぱい6年生の担任をしました。今年は、かわいいかわいい2年生の担任をしています。いろいろな学年の子どもたちと過ごせることも、小学校教員の楽しみのひとつだなと思います。



佐藤先生◆4月に新しい職場へ異動しました。元気いっぱいの25名の1年生と、毎日楽しく充実して過ごしています。『体育の学習』を生かした体育の授業づくりに、今年からさらに力を入れてがんばります!!



井樋先生◆教頭になって4年目。生涯スポーツを人に訴えながら、私はデスクワーク中心の生活。尿酸値と内臓脂肪低下のために有酸素運動を勧められるも、薬に頼る始末。“再考、自身の健康管理”が最大の課題……。



鈴木先生◆腰の調子が悪くレントゲンをとりました。運動が制限され、子どもたちと思い切り遊べません。それより残念だったのが「すべり症」という病名です。せめてトークではすべらないよう気をつけます。



濱田先生◆教務主任2年目。水泳では、全学年の授業に出て真っ黒に日焼けしました。身体感覚を大切にしたい授業づくりや、ボール運動のゲーム構造を中核にした授業づくりに挑戦しようと考えています。



体育の学習と「副読本」

～子どもたちと運動との出会いを
コーディネートするために～

東京学芸大学教授 松田 恵示

体育の時間に「副読本」って必要なの？

算数、国語、理科、社会など教室の授業では、教科書や副読本、副教材などを使うことがほとんどである。けれども、体育の授業では、副読本などを使うことはそれほど多くない。体育の学習は子どもたちが実際に体を動かして行うものだから、本などに目を通させているよりも、できるだけ運動を多くさせたい。こういう思いが私たち教師にあるのかもしれない。あるいは、子どもたちのほうにも、教室で座って行うほかの授業とは違って、運動場や体育館やプールで思いっきり運動できるのが体育の時間だから、本を持って「勉強」みたいにするのは楽しくない、という思いがあるのかもしれない。こういう体育の授業に対する素朴な「感じ」があるので、体育の時間に「副読本」と言われても、正直なところ「必ず必要だ」というふうに思っていないという現状があるのだろう。

この点では、体育の学習において副読本はどんな役に立つのか、といった、副読本の教材としての価値や可能性などについては、あまり考えられたことがないようにも思われる。けれども、あらためて副読本に触れてみると、それにはふだん気づかない大きな力が隠されており、少し「もったいない！」と思えるのである。そこでここでは、あらためて、体育の学習における副読本のもつ意味や可能性について、少し考えてみたい。

体育が「活動しているだけ」ではなく「学習」になるために

体育の時間は、子どもたちの好きな時間である。もちろん、なかには苦手だったり嫌いだったりす

る子どももいるけれども、運動やスポーツの行い方や学級集団の雰囲気などが整えられれば、活発に活動する子どもが増える時間である。ところが、難しいのは、こうして子どもたちに好まれる時間であるだけに、活動は楽しまれていた一方、教科の時間としてしっかりと「学習」になっていたのかどうか。そのあたりが少し怪しくなるときがある、ということである。学級会や運動会などの特別活動の時間や、休み時間や課外の時間などでも、運動やスポーツをする機会はあるから、ただ「活動しているだけ」では、体育の時間としては不十分だと言わざるをえない。けれども、行っている中身は同じ運動やスポーツだから、それを「学習」するというのを、どうすれば体育の時間でしっかりできるのか、このことが意外と難しいのである。

このように書くと、「体育の時間は学習だから、やっぱりしっかりと技能を身につけさせたり、高めさせたりしないとダメだ」というふうに感じられるかもしれない。しかし、言いたいのはそういうことではない。学習指導要領にも繰り返されているが、体育の目標は「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎」を育て、身につけることであり、これは単に「技能習得」だけの問題ではない。さらに大切なことは、「身につけたり、高めたり」ということを、単に先生が「させる」という形で指導するのであれば、それは「訓練(トレーニング)」であって、「学習(ラーニング)」とは呼ばれない、ということである。

では、体育の時間が子どもたちにとって「学習」になる、というのはどういうことなのだろうか。

そもそも「学習」とは、例えば、同じ失敗を何回も繰り返してしまったときに「学習がないな」などと言われてしまうように、経験を通して行動が変化すべく知識や技能を蓄えていくことを指している。体育で考えるなら、鉄棒の学習とは、鉄棒の経験を通して「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎」を蓄えていくことである。鉄棒の楽しさ、技能、態度、練習のしかた、知識、友達との協力のしかたなど、さまざまな内容がそこにはあろう。ただ、このときに重要なことは、「鉄棒の経験を通して」という最初の部分が、ただの「活動」になってしまえば、それは知識や技能を蓄えさせるほどの経験にはならないという点である。ここでの経験は、「意味ある経験」になる必要がある。つまり、「自発的・主体的」な「行動を変化させる」ほどの経験である必要があるということなのである。

このような経験となるためには、子どもにとって、それが「ねらいをもった活動」になることがいちばん大切なことである。なぜなら、「ねらい」をもって活動するということは、そもそも「ねらい」が単なる「課題」等ではなく、自分自身の意志に基づいて心の中にもつものであるから、「自発的・主体的」なものである。また、「ねらい」をもって活動するからこそ、活動の結果を「ねらいに沿ったものであったかどうか」で評価できることになり、自分自身が変化することを促すことになるからである。休み時間に行う運動では、例えば「戦術を工夫してゲームをがんばろう」とか「もっとチームワークがよくなるように努力しよう」などと、「ねらい」を立てては行われぬ。だからこそ、それは「やりっぱなし」になるし、「やりっぱなし」でよいからこそ、休み時間に気軽に楽しめる。けれども、「ねらい」をもった活動となれば、「やりっぱなし」ではなく、運動後に反省し、「よかった」「悪かった」という形で振り返るとともに、成果を確認したり、課題を認識したりする。こういう「ねらいの設定—活動—評価—修正」のサイクルこそが、知識や技能を蓄えさせ行動を変化させていくのである。

「ねらいをもつ」ための指導と「副読本」

こうなると、体育の時間に、どのようにすれば子どもたちにしっかりと「ねらい」をもたせ

ることができるのか、が問題となる。「これがねらいだから、みんなしっかりやりなさい」というように、「させる」ように指導するだけでは子どもたちが「ねらい」をもつことは難しい。

ここで、大きな役割を果たすのが「副読本」であろう。「ねらい」というのは、「こんなふうになりたい」「あんなふうになりたい」という形で、子どもたち自身の心の中から現れる。例えば、サッカーをやっていて、子どもの言葉でサッカーというゲームの特性やポイントなどが豊富な図とともに書いてあると、「こんなふうになりたい」「あんなふうになりたい」という子どもの意欲と目標が生まれてくる。「ねらい」とは、このように子ども自身が自ら情報に出会い、興味や関心を引き起こされたところから生まれてくるものである。

大人になった私たちでも、例えば、どこかに旅行に行くことになれば、まずは「ガイド」や「雑誌」を手に入れようとすることが多い。自分なりに、訪れようとする場所の情報にふれ、「なるほど」と頭の中のイメージが膨らみ、そして「ここここは行こう」「これは食べたいな」「これはお土産に買って帰りたいな」など、旅行先で「したいこと」、つまり旅の「ねらい」が自然と立てられていくのではないだろうか。このように、「自分から情報を読み込もうとする」こと、「文字以外の情報からイメージが喚起される」こと、さらには「内容が豊富で本質をついている」こと、あるいは「自由に好きなときに手に取れる」といった特徴が、私たちにこのような「ねらい」をもたらすのだと思う。そして、旅行が終わったあとも、部屋の本棚に「ガイド」や「雑誌」を残しておく、ふとしたときに手に取って楽しかった旅行の思い出をたどりながら、「もう一度行ってみようかな」「今度はここまわりたいな」などと、変化した自分を実感するとともに、新たな「ねらい」を見い出すきっかけとなったりする場合も少なくないのではなからうか。「ガイド」や「雑誌」がもつ、「出会い」をコーディネートする力である。

このように考えると、「副読本」は、子どもたちと運動との出会い＝学習をコーディネートするまさに「ガイド」である。もちろん、「ねらい」をもたせる指導は、「副読本」のみによって行われるものではないが、この教材のもつ力を活用することで、まずはどの先生もが「ねらい」をもた

せる学習指導にやさしく取り組むことができる。本来、運動は「言葉」で伝えにくい性格をもっている。しかし、「副読本」には、イラストや写真で、視覚的にそれを把握することができる工夫が随所に凝らされている。このように、「こんなふうになりたい」「あんなふうになりたい」ということを、子どもたちに「ねらい」としてもたせる支えになるところが、「副読本」の最大の力であろう。

逆に言えば、体育の学習指導において、「ねらいをもたせる」学習指導のあり方に、私たちは少し無頓着になりすぎているところはないだろうか。「技能をいかに身につけさせるか」とか「いかに運動を楽しく行わせるか」から、授業づくりを始めてしまっていないだろうか。体育の時間は、子どもたちにとって「学習」になっているだろうか。「副読本」の意義や力について教師自身が知ること、たいへん重要なことであるように思われる。

学習言語の獲得とつながりを生み出す「副読本」

次に取り上げたいのは、体育の時間における「学習言語」の問題である。学校の教科学習の時間には、日常会話にはない「言葉」がたくさん出てくる。例えば、先の「ねらい」や、よく授業で使われる「めあて」といった言葉もそうである。「相手チームのよいところを伝えてあげましょう」とか「つまずいているところを教えてあげましょう」といった言葉も実はそうである。この種の言葉は、子どもたちの日常会話には出てこない。授業でのみ使う特殊な言葉なのである。「ねらい」や「めあて」という言葉が、特殊な言葉になっていること自体、私たち教師は忘れがちであるが、例えば、クラスにもし帰国子女の子どもが転入してきたとしたら、こういう言葉をすぐに理解することができるかどうかを考えてみると、よくわかると思う。あるいは、小学校に初めて入ってきた1年生を思い浮かべてもいい。このような言葉に馴染ませ、学校では大切な言葉として理解させることが、子どもたちを指導するときに最も気を使うことの1つであろう。

確かに、よく考えてみると「今日のめあてはなんですか?」という問いを日常生活で行えば、ちょっと変わった言葉となってしまう。職員室の朝

の打ち合わせで、「今日のめあてを確認しましょう」などとも校長先生に言われたら、大人の間でも、確かに変な感じである。授業でしか流通しない、といってもよいだろう。では、なぜこのような言葉を使って教科の学習が行われるかということ、それは子どもたちに、日常生活に貼りついた経験に基づく理解を超えて、日常世界とは逆に距離をとらせることで、しっかり「考えたり」「行動したり」できるようになり、これまで知らなかった新しい力を身につけることに役立つからである。ものを「対象化(少し距離をとって眺めてみること)」して捉えたり、かかわったりして身につけようとする、といった「学習する」ということを子どもにもよくわかるように、特別な言葉を使って取り組ませようとするからである。

この意味からすると、「相手チームのよいところを伝えてあげましょう」とか「つまずいているところを教えてあげましょう」という言葉も同様である。「相手のよいところ」といっても、見方を変えれば山ほどあるわけだし、そもそも「相手のよいところ」に意識をもってふだんから相手を見ているわけではないので、学習が苦手な子どもたちは、こういう言葉自体の意味がわからずにいる、といった場合も多いのである。このような「学習言語」に馴染めなければ、教科での子どもの学習は停滞してしまう場合が多い。特に、体育の場合は運動を内容として扱っているので、より「言葉」との関係が他の教科に比べて難しい面もある。算数の問題を解く「コツ」は授業中にみんなで話したり考えたりすることはできるけれども、「逆上りのコツ」を授業中にみんなで話したり考えたりするのは、どのような言葉を使えばよいか、算数の時間よりもやはり難しいのではないか。「学習言語」と「運動の言語化」という問題は、体育の時間をもつ「言語活動」に関する二重のハードルである。しかし、こうした言語活動がスムーズに行われなければ、運動を振り返ったり、工夫したり、評価したりなど、体育における課題解決活動はできない。この点からすると、この「学習言語」を理解し、使えるようになるということは、体育の学習指導においてはたいへん大きな問題であると言えるのである。

それでは、このような「学習言語」をどのように学ぶのかと考えたときに、ここでも力を発揮す

学習のねらい

できそうなわざにちょう戦したり、
できるわざをくり返したり組み合わせたりする。

例4 後方支持回転

①はらを鉄ぼうにつけて回る。

●ポイント①
反動をつけて、足を大きくふり上げる。

学習しよう

やってみる

できそうなわざにちょう戦しよう。

ひざかけ上がり、さか上がり、後方かたひざかけ回転、前方支持回転、転向前おりなどができること。

ひろげる

できるわざをくり返したり、組み合わせたりしてみよう。

「上がる⇒回る⇒おりる」わざを組み合わせせて行うことができること。

練習のしかたの例

●足をふり上げて、足打ちをする。①

■ やりやすい鉄ぼうで連続さか上がり②③

■ 後方かかえこみ回り②

※副読本『体育の学習』の詳しい構成については、次ページをご覧ください。

るのが「副読本」という教材である。「副読本」には、ほとんどの場合、体育で行う運動の内容が「言葉」で整理されていたり、学習の道筋や、学習活動のポイントなどが、授業で使う「言葉」として表され(上図)、子どもにもわかりやすいようにレイアウトされている。この意味では、「副読本」は単に運動の行い方が解説されているテキストというのではなく、教科の学習を進めるためにまとめられている特別な資料=教材なのである。もちろん、授業では子どもたちにいろいろな資料を作成したり、配ったりすることも多いけれども、「学習言語」を体系的に学べるほどのものを、年間を通じて用意することはなかなか難しい。このようなときに、子どもが手に取り、先生の直接的な指導とともに、あるときは指示を受け資料として見たり、あるときは自分から見たり読んだりして、「学習言語」を理解するとともに、体育の学習を支えてくれるはたらきをもつものが「副読本」なのであろう。

一方で「副読本」には、子どもたちどうしのつながりを生み出していく力もある。

よく経験されることだが、同じ教科書を使ったことがその後話題として「あー、それいっしょだった!」という共感につながったり、実際に同じ教科書を使っているからこそ、クラスが違っていても教え合うことができたりするなど、子どもたちにとって教科書や副読本は、「コミュニケーション・ボンド(きずな・つながりの保証)」としてのはたらきをもっているものである。これは、体育の授業の中でももちろん見られる。さまざまな場面においてグループで話し合うときに、共通に「副読本」を持って話し合うことが、子どもたちに手がかりを与え、互いの交流を活発にしていく。

もちろん、「副読本」から生まれるつながりは、子どもたちどうしに限られるものではない。それは、先生と子どもたちをもつなぐだけでなく、保護者や他の大人と子どもたちをもつなぐものでもある。「ここを見てごらん」「いま、こんなことやってるの」「こんなことが書いてあったよ」など。「副読本」があるからこそ広がるコミュニケーションが、体育の学習に必要ないくつもの「大きな学びの輪」を生み出すことはよく見られることである。こうした「副読本」がもつ力にも、私たちは目を向ける必要があるのではないかと思われる。

体育の学習をさらに豊かなものにするために

体育の時間を子どもたちにとってさらに豊かなものにするためには、ここまで見てきたように「副読本」という教材が果たす役割は大きい。特に、ただ運動を行えばよい、というのではなく、「生涯にわたって運動に親しむ能力や資質の基礎」を、子どもたちがしっかりと学習することによって身につけようとするとき、「副読本」は、体育の時間だからこそ、その「要」となるほどに豊かな力をもつものであるし、「副読本」とともに学習するというスタイル自体が、体育の授業の当たり前の風景としてもっと全国で見られる必要があるように思われる。ところが、冒頭でも述べたように、体育の授業では「副読本」に対する認識と理解が弱く、「運動を行っていればよい」型の学習指導がまだまだ見られるのが現状である。

「本(副読本)とノートと鉛筆を持って体育の学習を行う」。こういう姿が多く为学校で普通に見られるようになることが期待されることである。

(教育社会学:まつだ・けいじ)

新版『体育の学習』の構成について

編集部

■児童書の基本的な紙面構成

平成23年度版の全面改訂新版『体育の学習』は、児童書と教師用指導書の2分冊形式で構成されており、教師用指導書で説明している考え方（各学年ともP.6～40）に基づいて単元計画例が構成されています（P.41～の「第3章 ○年生の単元計画と指導」）。

今改訂の大きな特徴は、新しい学習過程の提案「やってみる・ひろげる・ふかめる」にあるといえるでしょう。この考え方の背景には、新学習指導要領の「新しい学力観」における知識・技能の習得と、自ら学び自ら考える力の育成に向けて、これらに対立的あるいは二者択一的にとらえるのではなく、お互いが相互作用し合い、統合されていく連続体上の関係で成り立っているという考え方に基づいています。また、「習得・活用・探究」のそれぞれが一方に進むのではなく、行ったり来たりする往還運動として仕組まれていることを、児童書では、各フレーム間の「進む・戻る」の円形の矢印で表しています。

2つめの大きな特徴は、これまでの運動の特性（機能的特性、運動の楽しさ）に加えて、運動の魅力（構造的特性、動きやゲームのおもしろさ）にふれる観点の重視にあるといえるでしょう。これは、学習指導要領改訂の趣旨にある「運動の特性や魅力に応じて、身体能力や知識・技能を身に付けることができるようにする」という考え方に即したものです。具体的には、教師用指導書の単元計画例をご覧いただきたいのですが、「II. 運動の特性・ねらいと道筋」の項に、従前の「(1) 運動の特性」の下に「(2) 子どもから見た動きのおもしろさ」という項目が新たに設けられています。これらをもとに児童書の「学習のねらい」が導き出されていることとなります。

次のページでは、新版『体育の学習』4年のボールゲームを例に、具体的に見ていきます。

10 三角ベースボール

学習のねらい
ルールをくふうして、いろいろな三角ベースボールをする。

どちらが早くベースにつけるかな？

三角ベースボールのおもしろさは、これ！

ボール

打者や走者をアウトにするのができるかどうか。

悪いとってセーフになるかどうか、かなんだ。

ボールと打者のどちらが早く走るのとることができるかなんだ。

打つのが遅くても人も楽しめるよね。

打つのが遅くても人も楽しめるよね。

円の中心からボールを投げ入れる。ラインの外に落ちたら、ファウルでやり直し。

どっちが早いかな！

一本塁

やってみる
るいをとったり、とられないようにくふうして、バットレスベースボールをしよう。

バットレスベースボールのルール(のれい)

- チームの人数……7～9人
- ゲーム……3回の表・うらまで
- 塁は1塁だけとする。
- せめの打者は、1人ずつ本塁(円の中心)からボールをコートの中に投げ入れ、1塁へ走る。
- 守りチームはとんできたボールをキャッチして、1塁(ファースト)に送球する。
- ボールが1塁に送球されるより早く打者が1塁につけば1塁。ボールのほうが早いときは0点。
- チームの全員が投げ終わったらせめと守りを交代する。

やくそくのれい

- ゲームの始めと終わりにあいさつをする。
- なげまやキャッチミスでも、もみくを言ったり、けなしたりしない。

ゲームの進め方のれい

●練習(3分) ●ゲーム(1) ●戻し合い・練習(5分) ●ゲーム(2)

28

ひろげる

ルールやせめ方・守り方をくふうして、バットレスベースボールをしよう。

ルールのおもしろいれい①

ファウルエリア

- ファウルエリアをつくり、ファウルエリアに直接フライを投げ入れるとファウル。ゴロの場合はよい。

ルールのおもしろいれい②

●コートをせまくしてみよう。

せまくったのでアウトにしちゃうよ！

せめ方・守り方を考えよう

せつたいファーストより前に投げとるから、ファーストより守ろう！

1点とるよ。セカンドに投げたほうが早いよ。

ファーストより相手もそう思うんじゃない？

ファーストシフトだ。

ルールのおもしろいれい③

●ベースを2つにする。

●ファーストでセーフになった人は、次の打者が投げ入れたらセカンドに走る。

●フライを盗塁とられたときは、走者はファーストにもどらなければならない。

●セカンドに置いて1点。

ふかめる

ルールにおうじたせめ方・守り方をくふうして、ティーボールをしよう。

ルールのおもしろいれい

●バットで打っても手で投げ入れられてもよいことにする。

●バットで打つ場合は、ファウルエリアに直接フライを打ってよいことにする。

バットの理由

●手で投げ入れたほうがいいのか、バットのほうがいいのか、よくわからない。

●守りのくふうにはどんなものがある？

【P.31 ページ】

【P.31 ページ】

30

■単元最初の見開き上段で

課題解決学習のための学習内容を明確に表示

①単元番号・単元名と「単元タイトル」

教師用指導書で示されている「体育科の年間指導計画例」で示された単元構成順にページ配列されています。今改訂では、無機質な単元名とは別に、「単元タイトル」と称して、この授業への教師の願いやこだわりを、子どもが興味を示しそうなフレーズで表記しました。

②「学習のねらい」

今改訂では運動の機能的特性に構造的特性が加わり、その学年あるいはその学級の学習の準備状況を加味したものが「学習のねらい」となります。学習の準備状況は一般的な発達段階によって記していますので、実際の子どもの実態を見て微調整してください。

③「学習しよう」

新学習指導要領でうたわれている「学習内容の明確化」に即し、1年から6年までの全学年を通して新たに設けたコーナーです。

「やってみる・ひろげる・ふかめる」のそれぞれの枠囲みの上段には「どんな学習をするのか」が「○○しよう」という表記で具体的に書かれています。枠の下段は「学習して身につけさせたいこと」が具体的に書かれています。学習指導要領・解説の「技能」(体づくり運動は「運動」)がその中身になります。

この2つの学習内容を具体的に示すことによって、子どもたちが個人やチームのめあてを立てやすく、さらに意欲的に運動をする態度に結びついていくことにもなります。

各フレームの往還を示す円形の矢印は、前述したとおりで、集団でのゲームであっても個人的に前のフレームに戻って個人技能に挑戦してもよいことを表しています。

④「○○ゲームのおもしろさは、これ！」

ボール領域では、ボールを運ぶ、相手をかかわす、シュートをするなどのゲームを構成する「局面」に着目しました。これらの局面の「魅力・おもしろさ」を児童にきちんと伝えることで、ゲームの中でのそれらのおもしろい局面を味わうために、今自分(たち)に必要な技能は何かを具体的なめあてとして見つけ、自ら追い求めることをねらっています。ボール領域だけのコーナーです。

やってみる

いろいろな動きや投げ方はありますか？ パートレスベースボールをしよう。

野球、送球、ボールキャッチなど。

ひろげる

ボールをうまく止めたり、キャッチできるかな？

野球、送球、走るい、ボールキャッチなど。

ふかめる

ルールのおうじなせめ方・守り方をくふうして、ティーボールをしよう。

バッティング、野球、送球、走るいなど。

毎時間のはじめに **こんなゲームしてみよう**

■六むし(はさみっこ)

やられた！

やった！

おに

ポコン

●おに(2人)がキャッチボールしている間に内を6往還する。
●おににボールをぶつけられたらアウト。

コート1

おに

ファースト

18-20m

セカンド

アウト

コート2

おに

ファースト

こんな？

ボールをうまく止めたり、キャッチできないかな？

ポコン

31ページ

こんな？

どこをねらって投げたらセーフになるかな？

31ページ

ルールのおうじなせめ方

ファーストは、たいに待って守るよ。ボールがたいに当たると、走者がベースにつくのどちが先か、たいの音が鳴るのでわかりやすいね。

ポコン

1塁 (ファーストベース)

早く送球！

正確だ！

カバーするよ！

こしをおとしてね。

ゲームの中でためてみよう

ボールキャッチのしかた

ゴロ

フライ

●こしをおとして、体の正面でとる。

●ボールが落ちてくる所に、すばやく動き、両手でとる。

送球のしかた

●足を軽くあげ、右足に、体重をのせる。

●左足に体重をうつし、手をきかせて投げ。

バッティング

●こしをおして、ボールをよく振って守る。

思いっきり、速く打ってみよう。

どうすれば速くまでとばせるかな？

2人組で、ゴロやフライなどを入れたキャッチボールの練習をするのもいいね。

せめ方・守り方のくふうのいい

せめ方

空いているところをさがし、よくねらって投げ入れよう。ライズバウンドをねらうのもいいよ。

守り方

ボールがとんできたところの人の後ろに走りこんで、ボールが速くまで届かないようにしよう。(バックアップ)

せめ方

練習に点をとるには、手で投げ入れるほうが有利。自派があるなら、思いっきりバットで打って一度に点を取らそう。

守り方

打者が手で投げ入れたらバットか、あるいは強打者がどうかで守りの形をかえよう。

まとめ

1. 三角ベースボールのどんな動きがおもしろかったか話そう。

2. 次のことがよくできたら○、できたら◇、できなったら△をつける。

①みんなと楽しくゲームをすることができた。()

②ルールやせめ方・守り方、練習のしかたをくふうすることができた。()

③ボールキャッチや送球、バッティングが上手にできるようになった。()

④きまりややくそくを守ってゲームができた。()

子どもたちの発想を刺激して活発な学習が展開！

■授業のイメージをつかむ！

子どもたちにわかりやすいイラスト

次の体育の授業でどのようなことをするのか、子どもたちがイメージしやすいように、朝の会で『体育の学習』を見せて（写真1）、「今日からの体育はこんな運動をするよ」と投げかけた。

子どもたちからは「楽しそう！ 早くやってみたい」「ボールランドをやりたいな」と授業前から意欲的な感想が聞かれた。『体育の学習』のイラストから、子どもたちはこれから行う授業のイメージをつかむことができた。

[写真1]



今日の体育はこんな運動をするんだね！ 楽しそう！ 早くやりたいな！

■動き方のコツが吹き出しでわかりやすい

～おおしますまいるらんのうごきをしよう～

体育館の壁面に単元タイトルを記すことで（写真2）、子どもたちのやる気が増した（写真3・4）。

また、『体育の学習』のイラストを写真に撮り、拡大コピーしたものを作成し、その時間ごとで行った動きを貼っていった（写真2）。

単元前半で、『体育の学習』が有効的に使われた場面があった。それは、動きはわかっているけれどうまくいかなかったときに『体育の学習』を開いて、動きを確認している子がいたことである。

例えば、“フラフープランド”では、うまくフラフープを転がせなかった子が『体育の学習』（資料1）を見て、吹き出しに書かれている言葉を読み、それを真似して行っていた（写真5）。

指導者が他の子への指導を行っているときなどに、自分で動きを習得するための手段として単元前半は『体育の学習』が有効的に使われていた。

[資料1]



[写真2]



[写真3]



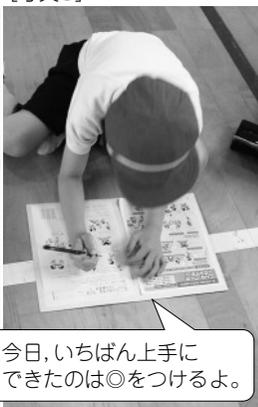
[写真4]



[写真5]



[写真6]



■1年生に記入しやすい学習カード

また、教師用指導書にある「学習カード」も今回活用したが（写真6）、1年生にも書きやすいように作られていたので、初めての学習カードも無理なく取り組み、評価の際に役立った。

[写真7(上)・8(下)]



[写真9(上)・10(中)・11(下)]



■子どもたちの発想を刺激する

～うごきをくふうしてできるかやってみよう～

単元後半はグループでいろいろな場をローテーションし、前半でできるようになった動きを工夫して行う活動だった。

しかし、1年生には「工夫」のイメージがつかずらいので、『体育の学習』を活用し(写真7)、グループで何をやるのか話し合いを行った(写真8)。

単元前半の紙面と後半の紙面が見開きになっているため、子どもたちから「あっ、この前にやった動きをこんなふうに変えてやるんだね。楽しそう」という声があがった。

工夫のしかたを『体育の学習』で知ると、今度は自分たちで考えた工夫が次々と出てきた。

子どもたちのなかには、工夫のしかたに迷ったり、決めた動きがわからなくなったりしているグループがあったので、そんなときは、指導者がもう一度『体育の学習』を見せて再確認できるようにしていった。

[子どもたちがひろげた動きの例]

- ・大きい輪に小さい輪を転がして通す(写真9)。
- ・首と首にボールを挟んで歩く(写真10)。
- ・グループみんなで「せーの」で転がる(写真11)。
- ・缶ぼっくりのコースをつくる。
- ・姿勢を変えてボールをキャッチ
- ・友達と輪を転がし合う。 など

子どもたちは動きがひとつできるようになると工夫することが楽しくなり、アイデアがどんどん出てきた。アイデアを出すきっかけとして、『体育の学習』を見たことがよかったのだと思う。

■子どもたちの意欲を喚起する

『体育の学習』を使用することで、特に低学年の子どもたちは体育の授業のイメージや、具体的な動きのイメージをつかみやすくなったと感じた。イラストを見て、やってみたい!という子どもたちの意欲を喚起することにもつながった。

また、体育を専門としない他のクラスの先生方からも、この『体育の学習』は、「授業の流し方がわかりやすい」「学習内容を子どもたちに伝えやすい」といった声も聞かれ、学年間でも同じ授業を行うことができた。

子どもたちの主体的な学習を支える！

■子どもたちがゲームを楽しむ姿を求めて

本実践は、1年生の「的当てゲーム」である。『体育の学習』では、はじめに的当てゲームの様相が提示されている。次に、円が二重になり、ドーナツ状の部分で的を守る守備が登場し、攻防が分離するゲームに発展する様相が示されている。子どもたちには「円の中に置いた的にボールを当てて早く倒すことができたチームが勝ち」というルールを提示した。『体育の学習』では、ポートボールの台の上に段ボールの的を置く図が示されているが、子どもたちに「的の置き方」にもこだわらせたかったので、一斗缶を縦に2台つなげたものを3本使用することにした。的が缶であるため、ボールが当たったときや、地面に倒れるときに大きな音がして子どもたちもより夢中になる。ゲームに夢中になりながら、1年生の子どもたちがボールを投げる技能を身につけ、チームで工夫して「早く的を倒す」ことに向けて、より一層ゲームを楽しむようになる姿を求めて学習計画を立てた。

■すぐにゲームを始めることができる

第1時で、はじめのルールを子どもたちに示す際に『体育の学習』がたいへん効果的であった(写真1)。従来はコート図を黒板に示しながらルールを確認したり、試しのゲームをしったりしながらおさえていくことが多かったが、わかりやすい絵とルールが示されているので、1年生の子どもたちにもすぐにルールが理解できたようである。そのため、すぐにゲームを始めることができた。

本実践では、10人ずつの4チームで対戦することにした。円の中に缶を置いて(写真2)、早く倒すことに挑戦する子どもたち。なかなか勝てないチームが、あるときから常勝するようになった。すると別のチームの児童が、「ずるいよ」と叫んだ。「あのチームは円のすぐそばに缶を置いているからすぐに倒すことができるんだよ」、他チームからも「ずるい」の声があがった。私は子どもたちを集めて考えさせた(写真3)。「はじに置いたらすぐに倒れておもしろくないよ」「真ん中近くに置かなくちゃ」。確かに「ここに置かなければいけない」というルールはそれまでなかった。子どもたちが合意形成しながらルールを確認し、自分たちのゲームをよりおもしろくしていく姿だといえる。

[写真1] 『体育の学習』ではじめのルールを確認



[写真2] グループでの的の置き方を相談



[写真3] 子どもたちでルールを決めていく



[写真4] 倒しやすい置き方を考える



[写真5] 右のチームは同じ方向からの的をねらう作戦



[写真6] 夢中になってボールを投げる子どもたち



[写真7] もっとゲームをおもしろくするには……。



[写真8] 『体育の学習』で次時の内容を確認



「真ん中近く」に缶を置くことを決めた子どもたちは、次に「缶の並べ方を工夫して倒す」ことに挑戦していった(写真4)。3台をくっつけて平面を大きくしたり、隙間を空けて並べてドミノのように一気に倒す作戦を考えたり、円の一方に集まり同じ方向からねらう作戦を試したりと学習が盛り上がった(写真5)。的を倒すという課題に向かって夢中になしむ子どもたちは、入学してはじめてのボールを扱ったゲームを通して、仲間と工夫することや、協力して勝つことを目指すおもしろさを学んだ。なにより、ボールを思いっきり投げるといふ「遊び」が大好きになっていった(写真6)。

■学習の発展に役立つ『体育の学習』

『体育の学習』では、的の置き方を工夫させることは明示されていない。これは、ルールを合意形成して確認することやチームで早く倒すコツを見つけることに学習のねらいを重点化した私が、アレンジした部分である。副読本を使いながら学習するときには、その通りにやるという利便さもあるが、学級の実態やどのような学びを構築していくのか、という視点から授業者が子どもとともに学習をつくっていく過程で副読本を効果的に利用することも大切であろう。授業の終盤、「このゲームをもっとおもしろくするにはどうしたらいいかな」という話題になった(写真7・8)。いくつかアイデアが出たあと、『体育の学習』の次のページに注目した児童がいた。「今度はこれをやってみよう」と攻防が分離して行う的当てゲームの様相に目をつけたのである。次回は、5人ずつのチームに分けてやってみよう、ということになった。『体育の学習』を使うよさは、このように次の学習に発展させる際の大きなヒントを子どもたちに見つけ出させることができることにもあるのではない。特に、1年生の場合は子どもたちのアイデアは豊富に出るものの、「今までの学習をもっと難しくすることでおもしろくなる」という本質的な部分に向かっていくのはなかなか難しい。そのようななかで、副読本が子どもたちの主体的な学習を支えている姿を見た思いであった。子どもたちの日記には、「的当てゲームをまたやりたいです」「今度は敵と味方に分かれてやります。楽しみです」という感想が見られた。(すずき・さとし)

子どもたち自ら考えて学習を進める！

■学習の進め方がわかりやすい

『体育の学習』を使い、最初にこの単元の学習の進め方(資料1)を確認した。特に“やってみる”でできた技を“ひろげる”で演技に入れていくという確認を行った。

この“やってみる”“ひろげる”という学習の進め方が子どもたちにとって理解しやすかったため、教師の側で学習の進め方の準備や説明に時間を割かなくても、子どもたちは戸惑うことなくすんなりと学習を進めることができた。

『体育の学習』を使っでの学習の進めやすさについては、特筆すべきものがあった。

■正確な連続写真から技のイメージをつかむ

学習の進め方を確認すること以外に、たくさんある技を知り、理解することにもたいへん有効だった(写真1)。以前に学習した経験がある技を思い出すことはもちろんのこと、技の数が多くなるので扱ったことを控えていた技も、『体育の学習』の連続写真を見て技の動きをイメージして子どもたちが簡単に理解し、動くことができた。

特に、“ひろげる”の組み合わせのバリエーションが増え、子どもたちは楽しんで様々な動きを行うことができた。

■「こんな動きしてみよう」で動ける体をつくる

「こんな動きしてみよう」では、具体的な技ができるようになるための関係のある動きが掲載されている。非日常的な動きの鉄棒運動であるが、子どもたちは「こんな動きしてみよう」に紹介されている運動を経験することで、以後の活動にとって重要な動ける体づくり、感覚づくりがしっかりと行えた。また、動き方がわかりやすく表現されていて、子どもたちがスムーズに動ける流れで構成されているので、友達とペアを組んで楽しんで動くことができた(写真2)。

■子どもたちどうしの教え合いが活発化

なんとと言っても『体育の学習』を使うことで、子どもたちどうしの教え合いが積極的にできるようになった。『体育の学習』を各自が手に持つことで技のポイントをチェックしながら、友達と教え合いができた(写真3～6)。また、従来だと、連

[資料1] 『体育の学習』6年 63頁



[写真1] オリエンテーションで活用



[写真2] 「こんな運動してみよう」をペアで行う



[写真3] ペアでの見合い、教え合い



[写真4] 『体育の学習』で技のポイントを伝える①



[写真5] 『体育の学習』で技のポイントを伝える②



[写真6] 『体育の学習』で技のポイントを伝える③



[写真7] 学習カードを利用して組み合わせを考える



続写真を見て、ただ「練習しなさい」としか言えなかったが、技ができるようになるための「練習のしかた」が詳しく紹介されているため、自分たちで考えながら、鉄棒運動を進んで活動することができていた。

さらに、この詳細な「練習のしかた」は、運動が「できる子／できない子」という二極化が進行しているなか、本書を使うことで技能レベルの二極化を避けるためにも大事だと感じた。

■自分で考えて活動できる

『体育の学習』には技が豊富に掲載されている。教師の側で児童が取り組む技を絞り込まないで、子どもたち自身が多くの技の中から自分が挑戦する技を選んで活動することができた。また、技がたくさん掲載されているので技の組み合わせのバリエーションが増えた。

付属の学習カードを利用して技を組み合わせることで、簡単に組み合わせ技を考えることができ(写真7)、自信をもって演技することができていた。

■子どもたちの感想から

- ・技のポイントがいっぱい書いてあってわかりやすかった。
 - ・「足を大きく振る」や「手の返し」など、大切なところが書いてあった。
 - ・連続写真で技が紹介されていてわかりやすかった。
 - ・どこで膝を曲げたり伸ばしたりするか、具体的にどうすればいいかがよくわかった。
- 全体的に、子どもたちからは技のポイントがわかりやすい点と写真で見やすい点がよくあげられていた。

■おわりに

実際に『体育の学習』を使用して授業を行ってみて、子どもたちが動き方を見てすぐに動けるようになること。動きのポイントを見て、教え合いができること。授業の準備を簡単に行うことができること。そしてなにより、これを使って授業がすぐにできることを実感した。最後に、動ける体づくりをして、鉄棒運動の楽しさを十分に味わわせてあげてほしいと思います。(ふくしま・まさみ)



「なでしこジャパン」と東日本大震災

ジャーナリスト 岡崎 満義

ゴーマン美智子から「なでしこジャパン」へ

「なでしこジャパン」の快挙は、ほんとうにうれしかった。深夜のテレビ中継にクギ付けになり、手に汗握って見入った。川澄奈穂美の長いループシュートの優雅な弧、アメリカとの決勝戦で見せた宮間あやの低い正確なCK、それに合わせた澤穂希の奇跡としか思えない右脚ボレーシュート、PK戦でアメリカを完璧に封じ込めたGK海堀あゆみの飛燕さながらの好セーブ、どれもこれも忘れられないシーンだが、何よりもピッチに出た選手全員が、“おんな長友”のように、走って走って走りまくった高温高压のエネルギーの奔騰する姿に、思わず涙がこぼれそうになった。

「なでしこジャパン」は、なぜW杯で優勝できたのか。それは技術的な専門家に任せるとして、私は、なぜ「なでしこジャパン」の優勝がこんなにうれしいのか、少し考えてみたい。

①長く忘れかけていた「小よく大を制す」「柔よく剛を制す」というスポーツの醍醐味を、久しぶりにたっぷり味わわせてくれたこと。外国選手に比べ体格、体力面での不利を、ピッチ狭しと走りまくる運動量でしのぎ、それは肉体的運動量という以上に、「精神の運動量」のすばらしさを感じさせてくれた、と言いたいほど。なでしこ選手の1人ひとりが、激しく美しく回転する精神そのものように見えた。まるでモーツァルトの音楽だ。

②聞けば彼女たちは年収400万円以下、プロ契約はごくわずか、大半はアマチュアとして働きながら好きなサッカーに打ち込んでいる。今やプロ全盛時代、世界最高の技能を見せるプロに、高額収入のあるのは当たり前。しかし、大才能人たちはときに薬物まみれ、金まみれ、スキャンダルまみれになった姿を見せて、私たちファンをがっかりさせる。それに比べれば、わがなでしこたちは“清貧”と言っていい。日本人のひそやかな願望としての“清貧”である。オリンピック憲章から“ア

マチュア”の文字が消えたキラニンIOC会長時代から商業主義オンリーのサマランチ時代を経て、スポーツは大きく変貌した。もう一度、スポーツの原点、アマチュアのよさを考えてみたい、と思わせるものが、「なでしこジャパン」にはあった。

③最年長の澤選手は15歳で日本代表になり、3回のオリンピックを経験している。その姿を小学生時代に見て憧れ、サッカーに打ち込み、ついに今回同じ「なでしこジャパン」のメンバーになった人もいる。スポーツに年齢差なし。才能に恵まれ、努力を惜しまない人に与えられる豊かな平等性。そこがよい。サッカーが好きとなれば、男も女もない。男が競い、楽しめるスポーツなら、女も同じように競い合い、楽しめる。スポーツは人間が生み出した貴重な公共財だと思うから、この性差を超えた大なる平等性は、なんとも気持ちがよい。マネーゲーム、金融工学、テロ、原子力……人間が生み出した“文化”が地球を破滅させる恐れなしとしないが、だからこそスポーツは地球を救う、と言える時代が来るかもしれない、となでしこたちは予感させるのだ。

スポーツで世界的に活躍した日本人女性は、昭和初期の人見絹枝、前畑秀子らたくさんいるが、「なでしこジャパン」につながる起点となったのは、1964(昭和39)年の東京オリンピック、女子バレーで優勝した“東洋の魔女”の活躍、と思えるが、むしろそれよりも、10年後の1974(昭和49)年のボストンマラソンに優勝した日本人女性ゴーマン美智子さんにある、と私は思いたい。

ゴーマン美智子さんに刺激を受けたかのように、日本に“走る女性”が大量に出現した。昭和49年、私は月刊『文藝春秋』編集部で働いていたが、フリーカメラマンの橋本治朗さんに「皇居一周マラソン」というグラビアを作ってもらった。今でこそ日常的な風景になってしまったが、昼間、Tシャツ短パン姿で皇居周辺を走り回る若い女性、続い

て中年女性が出現したのは、目を見張ったものだ。戦後、東京はオリンピックの年に空中楼阁のような高速道路や新幹線、少し遅れて霞ヶ関ビルなどの超高層ビルがあらわれて風景が一変した。そして、その10年後の“走る女性”の大量出現で、東京の風景はまた変わった。最初が都市のハードウェアの変貌とすれば、2度目はソフトウェア、女性のライフスタイルの変化の兆しであった。

新しい共同体のスタイルの誕生

数年前、テレビのあるドキュメンタリー番組の中で、女性の医学博士が「大正時代の女性の平均寿命は43歳でした。5、6人子どもを産んで生殖活動を終えたら、ほぼ同時に死を迎える、といっても過言ではありませんでした」とコメントしたのを聞いて、ギョッととなった。それがほんの90年ほど前の日本女性の姿だった。

今、女性の平均年齢は86歳余りで、その頃のちょうど2倍の長さになっている。財産のある人、才能のある人、権力をもつ人だけでなく、どんな人でも86年くらいは生きなければならない大長寿時代になった。昔ながらの、家父長的男社会では90年近くは生き抜けない。そのことを本能的に察知した女性たちは、まず走り始めることから、生活スタイルを変えようとしたのだ。たくさんの女性が、老いも若きも走り始めることで、世の中の風景が変わり、男社会に風穴があいてきた。女性の肉体的運動量が増えただけでなく、精神の運動量も増えてきた。例えば、1935(昭和10)年から始まった芥川賞の受賞者は、1975(昭和50)年頃を境に、それ以後の男女の作家比はほぼ1:1になってきた。それまでの40年間はその比率は10:1である。当然、この頃から「女流作家」「男まさり」などの言葉は死語となった。

今からちょうど20年前の1991年、その年に100歳を迎えた双子姉妹の成田きんさんと蟹江きんさんが大変な人気者となり、いくつものテレビCMにも出演した。あるとき、マスコミの記者に囲まれて質問を受けた。

「テレビコマーシャル出演などで、出演料がかなり入るでしょうが、どう使っていますか？」

2人は「老後のために貯金しています」とケロッと答えた。私は目からウロコが落ちるような気がした。女性には「老」はあっても「老後」はない。

あるいは、「老後」はいくつになっても今の先、若い人に「いま、ここ」が大事であるように、「老」にとっても「いま、ここ」が大事なのだ。ひるがえって男性はどうなのか。企業内生活が終わり、定年退職したとたんに、「老後」が始まる。企業外生活は即「老後」と意識されるようなライフスタイルから離れられないのだ。

1945(昭和20)年、敗戦を迎え、日本は焼野原からの復興が始まった。「戦後強くなったのはクツ下とオンナ」とよく言われた。確かにクツ下はすぐ破れなくなったが、オンナが強くなるには相当の時間がかかっている。よいわるいは別にして、戦後、徹底的にアメリカナイズされた社会の中で、「クツ下とオンナ」は強くなっていったのだ。アメリカナイズされた生活は、もちろんオトコにもメリットを与えている。オトコだって平均寿命は80歳近くにまで達している。「老後」意識をもったままでも、とにかく80年近く生きられるようになった。

3月11日の東日本大震災以降、「絆」が強く求められている。その直前まで、「無縁社会」の到来を告げて、孤独死の増加に警鐘を鳴らしていたから、無残な大震災を体験していっそう共同体的な血縁、地縁、社縁の「絆」への思いも強くなったであろう。しかし、戦後の社会のあり方を見れば、伝統的な家族共同体から個を切り離し、都会へ吸収して高度経済成長を続けた。その個はいわば企業共同体に囲い込まれた、今は企業もその継続は難しくなっている。年功序列、終身雇用は“今は昔”のこととなった。これまであった共同体を復活するのはまず無理だと思われる。疑似家族共同体をつくってきた大相撲の相撲部屋は、今や共同体というタグははめられなくなって、大相撲は迷走中である。いわば、これまで私たちが経験してきた共同体=絆は、ほとんど機能不全に陥っている。復旧はありえない。新生あるのみだ。

そこで「なでしこジャパン」の登場となる。なでしこたちは、自分の好きなサッカーを、「いま、ここ」の場で全力を投じてやりきろうとしている。環境が悪くても、好きなサッカーを続けるために、あらゆる努力、工夫をして取り組んでいる。そのスタイルに共鳴する者が集まって、緩やかな連帯、新しい共同体が生まれる。そのひとつの道筋を「なでしこジャパン」は、W杯に優勝することで、鮮やかに私たちにを見せてくれたのである。

おかげさまで、みつよし／一九三六年鳥取県生まれ。京都大学文学部卒業後、(株)文藝春秋入社。一九八〇年「スポーツグラフィック誌『ナンバー』」創刊にあたり初代編集長となる。その後各誌の編集長を歴任し、退社後はジャーナリストとして活躍。近著「人と出会った」が岩波書店より好評発売中。

「わかる」「できる」「かかわる」ことを大切にした体育学習のあり方

富山県高岡市立定塚小学校教諭 本多 素奈緒

■実践にあたって

本学級の子どもたちの多くは、運動することが大好きである。しかし、なかには走ることや体育の学習を苦手と感じている子どもたちもいる。運動の楽しさを求める姿や味わう楽しさの質は、子ども1人ひとりによって違う。運動がもつ魅力や機能的特性に触れながら、その子どもなりに「わかった」「できた」と心と体で実感し、体育の学習を通して運動の楽しさを味わってほしいと考えた。そこで、「わかる」「できる」「かかわる」をキーワードに、教材提示や学習過程を工夫し、陸上運動「ハードル走」の授業実践を試みた。

■実践内容

(1) 単元名……ハードル走

～スピードにのってとび越そう～

(2) 単元の目標

○技能

・リズムよくハードルをとび越したり、インターバルを走ったりすることができる。

○態度

- ・めあてを達成しようと、進んでハードル走に取り組むことができる。
- ・友達と教え合い、楽しんで活動することができる。
- ・友達のよさやがんばりを見つけようとすることができる。

○思考・判断

・めあてを達成しようと、自分で考えながら走ったり、友達のアドバイスを聞いて自分の動きに生かしたりすることができる。

(3) 運動の特性

○機能的特性

陸上運動は、他人と「速さ」や「距離」、「高さ」を競い合ったり、自分自身の記録の向上を目指したりすることで楽しさや喜びを味わうことができるスポーツである。ハードル走は、一定距離内に一定間隔で置かれた障害を走り越しながら、ゴールまでのタイムを競う種目である。一定間隔に置かれた障害をすばやくとび越すこととインターバルをリズムよく走ることで、記録の向上を目指すところに楽しさがある。

○構造的特性

3歩目で地面を蹴ってリズムカルにハードルをとび越しながら走る動きに、構造的特性がある。子どもから見たハードル走の動きのおもしろさという点では、速さを競う楽しさに加えて、4台のハードルを決まった歩数で走り越えることで心地よいリズムの繰り返しを感じ、そこに爽快感や達成感を味わうことができる。

○効果的特性

ハードル走を行うことで、踏み切る感覚が養われ、その動きを走り幅とび等の跳躍種目に生かしたり、バレーボールのスパイクやバスケットボールのシュートの動きに生かしたりすることができる。また、自分やグループの記録を更新するためにめあてをもち、インターバルや練習方法を工夫しながら、仲間と協力したり教え合ったりして楽しく取り組むことができるようになる。

(4) 児童の実態

○運動に対する意欲

朝マラソンにはほぼ全員が参加し、毎日1～2kmを走っている。休み時間は読書をしたり絵を描いたりして過ごす児童も数名いるが、友達となわとびや鬼ごっこ、ドッジボール等をして楽しんで体を動かし遊んでいる児童がほとんどである。

アンケート結果(表1)の「走るのが好きでは

ない」と答えた児童は、肥満傾向の児童が多く、その理由として人と比べて遅いということをあげている。また、「体育が好きではない」と答えた児童の理由の多くは、苦手な種目（マットやとび箱等）の授業があるからというものだった。

○技能

50m走のタイムは、8秒台が9人、9秒台が13人、10秒台が11人、11秒以上が4人で、いちばん速い児童と遅い児童では3秒以上の差がある。平均タイムは、男子が9.90秒、女子が9.75秒と男子が女子より遅い。その理由としては、男子に肥満傾向の児童が多いことが考えられる。また、男女とも全国平均を大きく下回ることから、走力が劣っていることがわかる。反面、シャトルランの平

[表1] 運動や走ることなどに対するアンケート結果

項目	はい	いいえ
運動は好きですか。	33人	3人
走ることは好きですか。	24人	12人
体育の学習は好きですか。	27人	9人

均は、男子62回、女子50回と全国平均を大きく上回っており、持久力はすぐれている。

5年生の2学期にハードル走を学習したが、その際は、障害を怖がったり足が合わなかったりして、ハードルを越える前にスピードが落ちたり、ハードルを越えた後にバランスを崩したりする児童が多かった。

(5) 全体計画 (全8時間) ……表2 参照

[表2] 全体計画

	1	2	3	4	5 (本時)	6	7	8	
主な学習の流れ	ハードルに親しもう		リズムカルなハードル走を目指そう					記録会をしよう	
	○「めやすの記録」の設定。 ○3歩のリズムの理解。 ○自分に合ったコースを選ぶ。 ○踏み切り足を決める。		○準備運動 ○自分に合ったインターバルで練習する。(個人練習) ○友達と見合い、教え合う。タイムを計測する。(パワーアップタイム) ○学習の振り返り					○学習のまとめ ○記録会をし、自分の上達を実感する。	
意識させたい動き	スピードを落とさずにハードルをとび越すことができる								
	「自分に合ったインターバルのコースを見つける」 「踏み切り足を決める」		「ハードルをまたぐようにとび越す」	「遠くから踏み切って、近くに着地する」	「振り上げ足をまっすぐに前に出してとび越す」	「上体を前傾させながら、ハードルをとび越す」	「最後までリズムカルに走る」		
教師の支援・指導	・足が合わなくて困っている児童には、逆足からスタートしてみるように助言したり、自分に合ったコースを勧めたりする。 ・リズムが悪い児童には、リズムをとりやすくするために、横で手をたたく。		・見ている児童がわかりやすいように、横や正面等それぞれの動きに合わせて見やすい位置を教える。 ・動きをうまくイメージできない児童には、歩きながらや座りながら、動きを確認させる。 ・ハードルに対する恐怖心から動きができていない児童には、段ボールやウレタンをはったハードルで跳ぶように助言する。 ・横から見る役割をつくり、教え合う。					・連合運動会に向けて児童の意識が高まるように、運動会の話を取り上げたり、ルールを教えたりする。	

【表3】 本時の学習

※ () ……時間配分, [] ……評価

学習活動	教師の支援・指導
<p>1 準備運動 (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○グループで声をかけ合いながら、スキップやミニハードルジャンプなどをする。 ○40m川とび走×1 	<ul style="list-style-type: none"> ・本単元の学習で指導してきたポイントを掲示しておき、児童が再確認しながら練習できるようにする。 ・走りながら遠くに踏み切る感覚をつかめるように、川とびを入れる。
<p>振り上げ足をまっすぐにシュッと出そう</p>	
<p>2 ハードル走</p> <ul style="list-style-type: none"> ○本時のポイントを確認し、自分に合ったインターバルで練習する。(10分) ○パワーアップタイム (25分) 	<ul style="list-style-type: none"> ・よい動きの児童をその場でほめることで、動きのよさに気づくことができるようにする。 ・足が合わなくて困っている児童には、逆足からスタートしてみるように助言する。 ・リズムが悪い児童には、横で手をたたいてよいリズムをとりやすくする。 ・コースの中央に白線を引き、振り上げ足をまっすぐに出すめやすくなるようにする (写真1)。 ・見る役割の児童は、横からでは振り上げ足がまっすぐに出ているか判断しにくいいため、走者の正面に立って見るように指導する。 ・グループ競争を行うことで、互いに見合ったり教え合ったりしてかわりが生まれ、めあてを達成しようとする意欲を高める。 ・次時のポイントとなる動きが上手な児童を取り上げ、みんなで見ることで、次時の学習への意欲を高める。 ・学習の振り返りをカードに記入する (写真2)。
<p>3 学習の振り返り (5分)</p> 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 10px;"> <p>グループで教え合いながら、振り上げ足をまっすぐにすばやく出してハードルをとび越そうとしている。</p> <p>【関心・意欲・態度】(観察・カード)</p> </div>

(6) 本時の学習 (5 / 8) ……表3 参照

(7) 授業の実際

ハードル走の楽しさは、スムーズに無駄なくハードルをとび越し、ハードリングによって得られる心地よいリズムの繰り返しを感じることにある。そのため、ハードリングの技術を高め、リズムよくインターバルが走れるようになると、走力が低い児童にも爽快感や達成感を感じることができる考えた。

●よりよいハードル走のイメージがわかる導入の工夫

ハードル走の導入として、陸上競技会のビデオ

を見る活動を取り入れた。一流選手のハードル走を見ながら、3歩のリズムを確かめたり、よりよいハードリングのイメージをもったりすることができた。また、ビデオを見ながらハードルのポイントとなる動きを見つけ、それを授業の中でわかりやすい言葉や図で提示した。どうしてそのポイントがよりよいハードル走につながるのかもよい見本と悪い見本を比較しながら児童に教えることで、ポイントの意味や大切さを理解し、課題に挑戦していこうとする意欲が高まったと考える。また、ポイントは単元を通して掲示しておき、児童が自分や仲間の動きを振り返ったり、上達を確かめたりすることができるようにした。

【表4】 5種類のコース

	ハードルの高さ(cm)	インターバル(m)
A	40 (段ボール)	5
B	50	5.5
C	50	6
D	50	6.5
E	50	7

●できることを実感した場の工夫

5種類のコース(表4)を選べるようにしたことで、児童は自分に合ったインターバルのコースを見つけ、苦手意識をもたずに取り組むことができるようになった。また、段ボールを使ったハードルを準備し、障害物に対する恐怖心を取り除くようにすることで、障害物のイメージが「怖い」「痛そう」から「楽しそう」「うまくとび越えたい」という、児童の意欲を高めるものになった。自分に合ったコースを選ぶことで、運動能力の高い低いにかかわらず、単元の最後には、どの児童もハードルの楽しさである心地よいリズムの繰り返しを感じることができた。

最初はハードルに恐怖感がありAコースで練習をしていた児童も、単元の終わりには全員がB・Cコースに挑戦し、意欲的に活動する姿が見られるようになった。

●仲間とのかかわりを深めためやすの記録の設定

単元の最初、中間、最後に記録会を行い、数字で自分の上達を実感できるようにした。自分の記録は、40m走の記録をもとに「めやすの記録」を各自が設定し、その「めやすの記録」よりどれだけ速かったか遅かったかを点数化して評価した。めやすの記録は、「40m走の記録+4台×0.3秒」とする。めやすの記録を設定し、点数化することで走力にかかわらずに自分の伸びを実感し、「できるようになった」という達成感や満足感を感じることができ、そのことが、運動への意欲につながったと考える。

また、そのめやすの記録を点数化し、合計点をグループで競争したことで、グループ内のかかわりが生まれ、話し合い活動が活発になった(1グループの人数は、6~7人)。

●「ポイント言葉」と「パワーアップタイム」

各時間の指導内容を明確にし、それを「ポイント言葉」として児童と共通理解して技術ポイントを共有した。そして、それをもとにしてグループ

の仲間どうして教え合う活動「パワーアップタイム」を取り入れた。見るポイントを明確にすることで、何がよくて何が悪いのか、アドバイスがしやすくなり、運動の得意、不得意にかかわらず意見を言うことができるようになった。アドバイスする側もされる側もはっきりとできたかできなかったかがわかるようにするため、マーカー等の補助教具を使ったり、見る視点を教師が教えたりした。運動が苦手な児童にとっては、運動が得意な友達にアドバイスできたことが自信になり、運動に前向きに取り組むきっかけになった。また、仲間の動きを明確な視点をもって観察することで、動きのよいところ、悪いところを目で確認できた。

●見通しがもてる課題の提示

単元を通して児童に身につけさせたい動きを「スピードを落とさずにハードルをとび越すことができる」とし、その動きに到達するために、各時間で身につけたい動きを決め、それをめあてとして学習に取り組んだ。また、そのめあてが達成できるように、必要な練習方法やその動きの意義を教師が積極的に指導することにより、児童の動きが高まった。「ターン、タ、タン、タン、ターン」や「シュッ」等の擬態語や擬音語を「ポイント言葉」として用いることも、児童が動きをイメージしやすく、技能の習得につながったと考えられる。

(8) 課題

「ポイント言葉」は児童が動きをイメージしやすく有効であったが、描くイメージがそれぞれ違っていることもあるので、全体の場で言語化したり試演したりして、イメージを共通のものとしておくことが重要である。

■今後に向けて

学習が進むにつれて、目をキラキラと輝かせながら楽しそうにハードル走をしたり仲間と話し合っている姿を見ることができ、何よりもうれしかった。

これからも、子どもたち1人ひとりが運動の楽しさを味わうことができるような授業を工夫していきたい。(ほんだ・すなお)



体育学習から学級生活まで 広がるグループ学習

福岡県福岡市立長丘小学校教頭 井樋 述弥

はじめに

1人ひとと役。1年生のときは大切な取り組みである。これは誰も認めるものであろう。給食当番を表す掲示物が教室にある。例えば、パンはA君とBさん。牛乳はCさんとD君等々。1人ひとりの名札がそれぞれの当番のところにきちんと入れられている。

ところが、6年になっても同じような掲示物があることがある。グループで当番を行うことの意味が、どのようにとらえられているのか疑問である。

日常的な当番活動から学習の1つの形態としての班学習、これら複数の子もたちによって行われるグループ学習を通して、6年間で何を身につけさせたいのだろうか。

1. グループ学習とは

私は、グループ学習を、教師側の都合（例えば教師の補助機関となることや、効率性を求めるための手段となること）によるものではなく、子どもたちどうしが好き嫌いの感情を抑え、損得の利害を超え、共有化した目標に向かって、それぞれの特長を活かしながら、自発的かつ自治的に活動していく学習だととらえている。

そしてそこではグループ学習の直接的効果（学習の評価）も大切だが、教師は、グループ学習の過程の中で子どもどうしの関係がどのように変化、あるいは洗練化されていったのかを、子どもたちに認識させていくことが大切である。

2. グループ学習の効果とは

では、グループ学習で何を学ぶのだろうか。体育学習をイメージしながら、グループ学習がた

なる学習形態の1つではないことを、3つの見取りの視点から確認しておきたい。

まず第1に、目的・目標の共有化ができているか。つまり、相手チームに勝つという目的のために、チームのめあてを共有化することができているかどうかである。

第2に、目的・目標の達成に向けての機関と機能を有しているか。つまり、チームのめあての達成のために、プレイヤーのポジションや記録等の機関を設置し、その子どもの個性や能力等に応じて、作戦を立てることができているかどうかである。

第3に、自グループならびにこれと提携あるいは競争する他グループの利益や目的を実現するうえでの規律を維持、発展させることができるか。つまり、相手チームと公平・公正なゲームをするために一定のルールやマナーを確認したうえで、ゲームを行い、支障があれば適宜ルールを変更していく、といったことができているかどうかである。

このように、体育学習に置き換えると、グループ学習で何を学ぶかがよりわかりやすい。それは他教科と比べ、次の点が明らかであるからだ。

- ・体育が好きという子どもたちが多いこと。
- ・身体活動が伴い、結果が数値かあるいは「できた・できない」で一目瞭然のため、自身にとっての利益・不利益がわかりやすいこと。
- ・人間関係が、ゲームの勝敗やプロセスに大きな影響を与えること。

体育学習の内容論的には、これらのグループ学習で学ぶ内容は付随的内容のひとつであり、これが主たる内容と化してしまうと、体育学習の手段化となってしまう。しかし、体育学習においては、運動すること自体が目的であり、内容であること

をあくまで前提としつつも、グループ学習の効果が見えやすいことは事実である。

そして、それら3つの見取りの視点からは、他教科でも学級生活においても、子どもたち自身が体育学習で学んだグループ学習のよさを類推し、再構成していくことで、職務多忙化の中でも子どもたちの変容の姿が教師のパワーの源になり、そのパワーがまた子どもに返っていくという、まさにアウフヘーベンの過程を見て取ることができるだろう。

3. グループ学習で望む姿と指導性

目的・目標を共有化していくことはグループ学習の基本である。そのうえで、低学年のときはある程度、教師主導で役割分担をし、発達段階に応じた意味での「公平感」「平等感」をもたせることは大切である。しかし、中学年では、ルールづくりを中心とした学習を仕組むことで、ルールとは自分だけではなく、相手も含めてみんなが楽しむために変更していくことが可能であり、変更することの意味を学習するということが大切になる。そして高学年になると、目的・目標を達成するうえでの機関と機能の問題が重要になってくる。

体操服を忘れたら、体育の授業を見学しなさいと言われ、児童が校庭の隅っこにじっと座っている光景を今も見ることがある。

やや横道にそれるが、それは、国語の学習で教科書を忘れたから廊下に立っていなさい、という体罰と同じではないだろうか、と思われる。

いずれにしても、体操服を忘れたら、記録係や友達の補助、または作戦参謀等々の役割を子どもたちが決めていく姿が見られるようになるよう、教師が指導するチャンスではないだろうか。また、「今日はちょっと体調が悪そうだね」

「大丈夫だよ」

「予定では5分間ゲームに出るようになってきているけど、無理しなくていいよ。後は私が代わりに出るから、まかしといて」

こんな会話が出てくるような指導、教室での言葉かけを、体育学習に限らず、教師は行っているだろうか。

私は中学からサッカーをしていた。私が中学の頃はポジションを守ることを徹底的に指導された。当時ウイングと呼んでいた、サイドを走るフォワ

ードにとって、ライン沿いを走ったかどうかの評価は、いつも靴の裏が真っ白になったかどうかだった。ところが、今のJリーグや国際マッチの試合を見ていると、ゲーム開始時のポジションは決まっているけれども、ゲームが始まれば、ポジションなんてないようなもの。お互いがお互いの動きを予見し、あるいは察知し、次から次へとカバーしながら、縦横無尽に動いている。

おわりに

給食当番を細かく役割分担しないで、グループ全体に任せ、当番の目的とその達成に向けての機関・機能、そして規律を維持、発展させていくことで、どんな当番活動になるだろうか。

こんな会話が聞かれると感動する。

「今日はどうなんだね。熱いし、重たいから、僕とA君で運ぶよ。君は食器を頼むね」

「ありがとう。じゃあ、先に行行ってすぐ配膳できるように準備しておくね」

こんな様子も出てくる。

「あっ、B君はパン担当だったのに、もう遊びに行っているよ」

「遅れると学校全体に迷惑をかけるから、私たちで持って行こう」

その後、B君に「B君、パン担当だったこと忘れてでしょう。私たちが持って行ってあげたけど、これから気をつけてね」

「あっ、ごめん。ほくの代わりに持って行ってくれたんだ。今度から忘れないようにするよ」

状況に応じて、目的達成のために、機関と機能、そして規律まで自らが変化させながら臨機応変に活動していく。その基盤に、お互いの思いやりが感じられないだろうか。

中央大学教授の山田昌弘氏は、ある雑誌に「大震災で変わった日本人の“幸福観。”と題した中で、こう語っていた。

「他者を承認するという努力なくして、自分が承認されることもない。黙っていても地縁や血縁や職縁で『つながり』が与えられる時代は終わった。自分自身で選びとり、努力して維持していく『つながり』こそが、これからの幸福の源泉となるのだ」

グループ学習について再考していくことは、時代の流れなのかもしれない。(いひ・のぶや)



浮く・泳ぐ運動の実践から グループ学習の意味と効果を探る

千葉県千葉市立稲丘小学校教諭 濱田 敦志

1. 子ども主体のグループ学習

体育では、グループで学習する機会が多い。教師側からの指導方法としてのグループ学習ではなく、学習の主体者がモノや他者とのかかわり合いの中から運動の意味を生成させる学習ができないものだろうか、模索している。

今年は2・3年生の「水遊び」と「浮く・泳ぐ運動」を指導する機会を得た。水泳学習は、一斉指導や泳力別グループを組んでクロールや平泳ぎの泳法を教える授業形態が多いようであるが、「近代泳法の獲得」という授業スタイルではなく、水とのかかわりや他者とのかかわりを重視したグループ学習によって、試行錯誤の中から「状況に埋め込まれた学習内容が習得」されるのではないかと考え、授業を行った。今回は、3年生に焦点を当てて話を進めたい。学習過程は下表のように考えた。

2. 授業の足あと

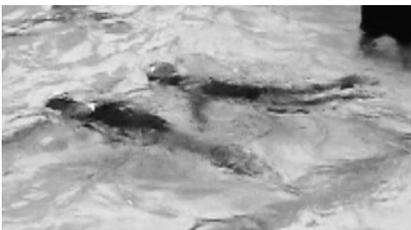
1・2時間目（2時間続きの授業展開）は、水慣れ（バブリング、ポビング、流れるプール・波のプールなど）をした後、泳力に関係なく2人組“ペア”をつくり、「どんな潜り方ができるかな」のテーマのもと、ペアでいろいろな潜り方を試行錯誤させた。子どもたちは潜ってじゃんけんや、

水の中で前転や後転、ひねりを加えて回転などをしていった（写真1, 2）。また、「先生、見て！ 潜れるよ」と、潜ろうとしながらも、ぷっかり浮いてしまう、なかなか潜れない身体を感じていた。子どもたちの活動は、潜って水中を進むように変容してきた（写真3）。水中でのバタ足は、膝の曲がり少なく、効率のよいバタ足になっている。「ペアでまねしてみる」（写真4）ことを伝え、活動が広がっていった。

3・4時間目の前半は、ペアでの活動であったが、後半は「ファミリーで、いろいろな潜り方で進む方法を教え合ってみよう」と4人組“ファミリー（ダブルペア）”の活動を行った。ファミリーでの活動は、今までのペア学習から、もっと活動が広がる学習になった。どうすればできるのかのコツを共感・共有をさせることにより、活動が広がっていったのである。話し合いが活発に行われ、動いて見せること・まねしてみることを絶えず繰り返した（写真5）。

5・6時間目から、「手のエンジン・足のエンジンを使って、水の中や水の上を進んでみよう」のテーマのもと、ペアでの学習を開始した。「手をグーにしたら、チョキでは、パーではどんな感じ？」と、水をかく感じの違いを感じられるようにはたらきかけた。水中でクロールをする子はいず、自然にバタ平やドル平が出てきた。また、浮いた状態ではエレメンタリーバックストロークやドルバック、手クロール・足平など、手のエンジンと足のエンジンの多様な組み合わせが登場した。後半は、「ファミリーで、今日やってみた手のエンジン・足のエンジンを教え合おう」というテーマで学習を進めた。

	1・2	3・4	5・6	7・8	9・10(時)
0	水慣れ（バブリング、ポビング、流れるプール・波のプールなど）				
↓	どんな潜り方ができるかな	“ペア”での活動		手のエンジン・足のエンジンを使って、水の中や水の上を進んでみよう	“ファミリー”での活動
		いろいろな潜り方で進む方法を教え合ってみよう	手のエンジン・足のエンジンを教え合おう		
90(分)					ゆっくりすいーつと進めるかな



7~10時間目も、同じ流れで「ゆっくりすいーと進めるかな」を加えて授業を進めた。

子どもたちは、自分が試してみた進み方を伝え合い、コツを共有しようとしていた。

3. グループ学習の意味

新学習指導要領では「習得・活用・探究」の学習スタイルがキーワードになっている。細江(2009)はそれを、子どもが「やってみる・ひろげる・ふかめる」という、子どもの学びに沿った学習過程に置き換えている。「やってみる」が個やグループ内での試行錯誤の活動、「ひろげる」がグループ内やグループ間での共感・共有の活動として、活動の主体を子どもに委ねていく学習になるのではと考える。

今回のペアとファミリーは生活班で行った。どういうグループを組ませるのかということに悩むのであるが、学びが成立するのは3~4人、グループ学習は6人ぐらいがちょうどよいと考えられる。グループを組む意味は、「いま・ここ」の状況と文脈の中で、どんな学びが生成しているのかを教師が見取ることにかかっていると言えよう。

4. 見取りと舵取りのある授業と放任の授業

私が行った授業では、子どもに委ね、グループの中で試行錯誤をさせる時間を十分確保した。子どもたちは、水の中で「身体が自由にならない感じ」から、「身体を自由に操作できる感じ」(写真6)へと変容していった。ここには、設定しなければならないポイントがいくつかあるように思われる。同じグループ学習法を用いれば、同じ授業が成立するのではない。ポイントをおさえないと、放任の授業となってしまうだろう。

では、何をおさえるのか。

「テーマ設定(学習内容)→活動の視点提示(具体的な手立て)→評価(見取り)→マネジメント(舵取り)」というポイントをおさえ、そしてそのサイクルで教師が支援することによって、子どもたちの中に「運動の意味」が生成されてくると考えられる。テーマ設定と活動の視点提示は、本稿「2. 授業の足あと」にて太字で記した部分である。

また、そこではさらに、「追究する意味のあるテーマ設定」と、教師が「子どもの活動をいかに見取るか」という力が重要になってくると考えられる。

- では、何を見取ればよいのか。
 - 子どもたちは何をおもしろいと感じているのか。
 - おもしろさは教師の意図したものなのか。
 - 教師の意図した活動が現れているのか。また、想像を超えた活動が現れているのか。
 - 子どもたちは何を共有しようとしているのか。
- これらの見取りをすることにより、次の舵取りの方向性を決めていくことができると考える。

おわりに

グループ学習には、「子どもを育てる」要素がたくさん含まれている。「ませたらキケン！」ではなく「ませたらハッケン！」なのだ。究極は、多様性の中から新たな“わたし”が発見されることにあるのではないだろうか。今回の学習で、かわった先生方の全員が、「水を嫌がる子がいなくなった」という子どもの見取りをしている。

教師の仕事は忙しい。学習から生活に至るまで、親から、地域から、すべての正しかろう方向に向かう指導を学校現場に要求され、それに答えるスーパーマンであると思う。現場に真理があり、現場に理論が必要だと感じている。(はまだ・あつし)